

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：34417

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K19195

研究課題名（和文）PICUに入室しているこどものセルフケア能力の変化に着目した看護支援モデルの開発

研究課題名（英文）Development of a nursing support model focusing on changes in self-care ability of children in PICU

研究代表者

西川 菜央（NISHIKAWA, Nao）

関西医科大学・看護学部・助教

研究者番号：60826890

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：小児集中治療室（以下、PICUとする）に入室するこどものセルフケア能力の変化のプロセスとそれに対する看護の実態調査を行うことで、こどもはPICUにおいて「自身の安全を確立する」ことや「身体のコントロール機能」を優先して満たそうとしていることがわかった。看護師はPICUにおいてこどもがこれまでに培ってきた身体のコントロール機能が正常から逸脱した際に、それを取り戻そうとするこどものセルフケア能力・セルフケアにも着目し、こども自身がセルフケアの行動・行為を正常化していくことができるよう支援していく必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、こどもは重篤な状態にあっても主体的に能力を行使し、正常性を取り戻そうとしている存在であることが明らかにした。これは、これまで身体の安寧に主眼が置かれてきた小児集中治療の看護において、こどもが全ての支援を必要としている存在ではなく、こどものもつセルフケア能力を活かした存在であることを認め、その能力を活かした支援へと変換することができる学術的な意義がある。そして、集中治療の場においても、こどもが主体的にこどもの心身機能の安定と生活を維持していく権利を保持する社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：Through an investigation into the process of changes in self-care abilities of children in Pediatric Intensive Care Unit (PICU), it was found that children in PICU prioritize "establishing their own safety" and "maintaining control over their bodies." Nurses in the PICU need to also focus on the self-care abilities and self-care actions of children as they try to regain the control functions that have deviated from normal. It is necessary to support children in normalizing their self-care behaviors and actions.

研究分野：小児看護学

キーワード：小児集中治療室 看護 こどもセルフケア看護理論 セルフケア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

(1) これまで小児集中治療室(以下、**PICU**とする)の看護として、米国では支援モデルが多用されているが、日本には**PICU**の支援モデルは存在していなかった。また、米国における支援モデルも**Patient-and Family-Centered Care**の概念を基にした支援モデルであった。アウトカムは両親の不安の軽減や両親と医療者のコミュニケーションの改善に焦点が当てられたものであり、こどもに焦点を当てたアウトカムを明示する支援モデルは見当たらなかった。

(2) わが国での**PICU**では、こどもが重篤な状態であるがゆえにこどもすべてに支援が必要な存在として捉え、身体の安寧を保つことを優先し、こどもの能力を代償することが支援の中心であった。しかし、報告者の以前の研究において、**PICU**であってもこどもは自ら「生きる力」を土台として、学習しながらセルフケア能力を発達させていることが明らかとなっている。医療者がこどもの能力をすべて代償することでこどもが生きるために発達させてきたセルフケア能力までを代償し、**PICU**においてこどもが主体的にこどもの心身機能の安定と生活を維持していくことを困難にしているのではないかと考えた。

そのため、本研究では**2019**年に片田らが構築した「こどもセルフケア看護理論」を基盤とし、身体の安寧を優先し、こどもの能力を代償する支援から、こどもが自身で生きていくための力を育むこどもを主体とした支援へ転換できる支援モデルの構築を目指した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は「**PICU**に入室しているこどものセルフケア能力の変化に着目した看護支援モデルを開発すること」である。

## 3. 研究の方法

### (1) PICUに入室するこどものセルフケア能力の変化のプロセスとそれに対する看護の実態調査

研究協力施設の**PICU**において、**PICU**に入室しているこども(病期、年齢、疾患は問わず)、養育者、受け持ち看護師を対象とし、「こどもの発揮しているセルフケア」「養育者のこどものセルフケアを補完する能力」「看護師の支援内容」を明らかにするために参加観察を行った。その後、参加観察のデータの裏付けとして、実際観察した養育者、看護師へインタビューを行い、実践や言動の意図を明らかにした。

収集されたデータを基に質的帰納的に分析し、**PICU**でのこどもの発揮しているセルフケアと看護師の支援の実態と課題を明らかにした。分析は研究協力施設の病院の看護師とともに実施した。

### (2) PICUにおけるこどものセルフケア能力に着目した看護支援方法の検討

「こどもセルフケア看護理論」を基に明らかとなった現状と課題を統合し、こどもの能力の変化に沿って具体的な支援モデルの枠組みや支援方法について検討した。

### (3) 支援モデル(案)の作成と支援モデル(案)の臨床導入により、支援モデルの開発と成果の発表

当初の研究計画では、支援モデル(案)の臨床導入までを目指していた。しかし、研究開始後、**Covid-19**蔓延の影響により、計画していたデータ収集が遅れたこと、また、最終年度においても、研究実施施設の**PICU**では面会制限が実施されていたため、臨床導入の実施は本研究期間内では難しいと判断した。

## 4. 研究成果

### (1) 研究対象者

「**PICU**に入室するこどものセルフケア能力の変化のプロセスとそれに対する看護師の実態調査」のデータ収集において、以下の対象者より協力を得た。

こども:9名

養育者:9名

看護師:8名

### (2) PICUに入室しているこどものセルフケア能力とそれに対する看護師の支援の実態

手術後の学童前期のA氏の事例を基に、**PICU**に入室しているこどものセルフケア能力とそれに対する看護師の支援の実態について述べる。

#### ・こどもの基本情報と**PICU**の環境

A氏、学童前期、男児、病名は先天性不整脈であった。今回は体内埋め込み式ペースメーカーのリード追加と電池交換の手術後**PICU**に予定入室し、手術後1日目であった。医療デバイスは静脈点滴(両上肢)、動脈点滴(上肢)、尿道カテーテル、心嚢・縦郭・胸腔ドレーンが挿入されていた。手術当日に抜管し、現在は酸素療法を使用せず、血液ガスデータも正常である。ドレーンからの排泄の血性は薄くなってきているものの、量が多く、利尿剤を静脈注射している。鎮痛薬は、オピオイド、傍脊椎神経ブロック、アセトアミノフェンを使用しており、参加観察時は疼痛スケールでも痛みはない様子であったが朝方は本人から痛みの訴えがあり、追加鎮痛薬を使用している。本朝より経口摂取量を制限しながら食事が開始となっている。

研究協力施設の**PICU**は14床(個室3床)であり、参加観察時、A氏はオープンフロアにて在

室していた。面会時間は10時から17時(コロナウイルス感染症蔓延の影響により面会時間は短縮中)、看護方式はパートナーシップ・ナーシング・システムであった。受け持ちをしていた看護師は、小児看護経験年数5年未満、PICU経験年数5年未満であった。

#### ・参加観察場面

母親が面会に入る直前から、母親が面会し、昼食を摂るまでの約30分間の参加観察を行った。

#### ・A氏のセルフケア能力とセルフケア

A氏は、PICU入室中「食べる」ことで身体が回復することを母から聞いており、それを理解して、自身がどれくらい食べることができたかを母親に確認している場面があった。それにより、<食べることが回復させる行為であると理解することができている>ことに加え、<自ら食べたいものを選び>、<食べたものを消化吸収することができていた>。

A氏は説明していた医療行為と自分のイメージしている医療行為に相違がある場合には、繰り返し母親に確認していた。そのことより、A氏は<自身の身体が安全であることを母親からの説明で確認していることができている>一方で、自身で理解できないことが続くと不安な表情を浮かべており、<心理的に準備していたことと異なったことが起きると自身で対処することが難しい>ことが明らかとなった。

A氏は母親がそばにいれば、母親に自分が必要な情報を求めていた。そのことにより、<母親に必要な情報を得て、自我を補強し、安心感を得ることができている>、しかし<母親がいない環境において、自身の身体に関する信頼を取り戻す方法や場所への信頼を得る手段がわからない>状況であった。

A氏は<循環機能、呼吸機能が正常範囲を維持できている>ことや、<看護師の指示には従うことができている>。また、痛みに対して自分から訴えることができおり、<自身の症状に気づき、それを周りに伝えることができている>ことが明らかになった。

#### ・A氏に必要なセルフケア

病状は徐々に安定してきていたものの、まだ障害・傷害期にあり、ペースメーカー不全を起こさず循環血流量を維持できるなどの<身体機能や生活するための機能の正常化>が必要であった。それと同時に、<PICUという場をA氏が自分にとって安全な場所であることを保証するための対処行動の獲得>や<PICUの場や自分の身体に関する基本的信頼を取り戻し、自分で自分の身体を調整できる感覚を持つこと>が必要であった。

#### ・親または養育者がこどものセルフケアを補完する能力

母親はこどもには自身の病気や治療の必要性について説明すべきと捉え、PICUの入室前よりPICUの環境や自身の面会時間などこどもがPICUでの過ごし方を想像するように説明を行っていた。しかし、PICUの入室前のこどもの様子や入室後の様子を見て、こどもにどこまで説明を行うべきかわからず、自分が説明を行うことでこどもが不安のなっているのではないかを感じていた。

#### ・こどものセルフケア不足を補うための看護者の能力

看護師は痛みのコントロールについて、A氏が<痛みを訴えることができる>ことをA氏の能力と捉え、痛みのコントロールに活かしていた。また、日常生活動作の拡大に向けて、A氏が<看護師の指示で協力的に動いてくれる>ことをこどもの能力として捉え、こどもの能力を活かし、日常生活動作を拡大するための看護を行っていた。

### (3) 研究結果により明らかとなったこと

・手術後、PICUに入室するこどもはこれまで獲得してきた自身への身体の基本的信頼や培ってきた生活をするためのセルフケアの行為も阻害されるため、自我が脆弱化し、自身の身体と安心感が揺らぐ体験であることが今回の事例で明らかになった。こどもがこれまで培ってきた「生活するためのセルフケア行為」や「身体のコントロール機能」を正常化していくことがPICUにおいてもこどもに必要なセルフケアとして重要であることがわかった。

・A氏の事例を例にすると、手術後1日目ということもあり、看護師は「こどもに必要なセルフケア」として、健康逸脱に対するセルフケアや普遍的セルフケアの中でも上位の「空気の摂取」や「水分/食事の摂取」「排泄」といった、こどもの身体機能や生活するための機能を優先的に正常化するためのこどものセルフケア能力を満たそうと支援を行っていた。一方で、こどもは母親の面会時に母親へ自身の身体の安全性や場の安全性について繰り返し確認する作業を行っており、「自身の安全を確立する」ためのセルフケアを満たそうとしていた。そのため、看護師が必要と考えているこどものセルフケアとこどもも自身が満たそうとしていたセルフケアにずれが生じていた。

・今後、モデルを構築するにあたり、PICUでは循環機能や呼吸機能などの身体機能を正常化することが優先されるのは当然であるが、こどもの不足している機能を補うのみではなく、「こども自身が自身の身体が安全であると感じること」や「こども自身がPICUという場が自分にとって安全であると感じる」ためのセルフケアを支援する必要性が示唆された。そのためには、こども自身がこれまでに培ってきた身体のコントロール機能が正常から逸脱した際に、それを取り戻そうとするこどものセルフケア能力・セルフケアにも着目し、こども自身がセルフケアの行動・行為を正常化していくことができるような支援のあり方を検討していく必要がある。

#### <参考文献>

片田範子(編)(2019);こどもセルフケア看護理論,医学書院,東京

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西川 菜央
2. 発表標題 PICUに入室しているこどものセルフケア能力とそれに対する看護師の支援の実態調査 手術後の学童前期の1例を通して
3. 学会等名 日本小児看護学会第32回学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 西川菜央	4. 発行年 2021年
2. 出版社 へるす出版	5. 総ページ数 6
3. 書名 小児看護	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------